

本妙律師荒行の瀧があつた。私は思はず襟を正さざるを得なかつた。

今や名利名聞に腐心して汲々たる宗教家の少からざるを思ふとき、自ら宗門の裏に隠れて萬歳の基を固めやうとされた本妙律師を偲ぶの念更に切なるものがある。

七面山へ

吉 田 碧 洞

シャツ一枚に靴といふ輕装に身ごしらへして、七面山へ初の登山と志す。御廟所を過ぎて晝猶暗き杉林の中を脚下に身延川の清流の音を聞きつゝ妙石坊を過ぐれば、いよく爪先上りになる、樹木益々茂つて已に深山の氣立つ。曲折多き道を辿る事時餘にして追分に着いた。脚下は何百丈とも知れない谷、森々たる樹海の盡くる所富士川の奔流あり、宛然身は天界に處するかと思はしむ。少憩汗を拭き、房主志しの甘酒を謝し足を道に向ければ稍廣くして下り道、佐渡の畑野から聖祖着岸の靈地、松ヶ崎へ行く小倉道中宛らであつた。汗一つ流さず却つて涼しさを感じ乍ら赤澤へ着いた。時計は一時すぎても二時には間があるので夏密柑二つ三つ買ひ求めて、皮をむき人通り少ないのを幸ひに頬張り

乍ら足を急がせた。崖の腹に僅かな道をつけてあつたのには臆病な自分は、何んと無しに薄氣味惡かつた。漂々たる春木川に架けた羽衣橋を渡る折は、もしやと思ひ乍らビク／＼して渡つた。いよく山道にかゝると、登つては休み休んでは登り漸くのこと、四十二丁目へ着いて休んで居つた折、御山も近くなつたと見へて、微かに太鼓の音が聞える。其の外時々聞ゆるは鳥の聲のみ……、道で行違つた人も七八人だけだ。法鼓の音に勇み立てられ總門を潜り、大鐘を三度ついて法味を捧げ早速隨身門へと急いだ。前の山は霧が深くて判然とはしないが、山形だけは臙け乍らみえる。然し地理に暗い自分にはどれが何れやら解らないのが残念だつた。

隨身門を下れば七面山の本殿は嚴として構へ、不斷の法鼓は鑿々として響き渡り、おのづと靈威にふれて一種異様な感がした。敬慎院に參籠を願ひ御寶前に法味を捧げて後、夕食を戴いた折は、山海の珍味も是れ以上のものはあるまいと思つた。御山の靈威とでもいふべきか。

天理を訪れて

矢野 鍊 明

今回大阪の岡島伊八氏の篤志によつて舉行された關西見學旅行團廿三名のその一員と